

近藤みゆき 『王朝和歌研究の方法』

伊 井 春 樹

「百首」という定数歌を生み出した曾禰好忠の『好忠百首』が、時を隔てて「返し」という形式で『順百首』『重之百首』の派生を招き、さらに『三百六十首歌』へと展開する相の解明のすばらしさに私は目を見張る思いがし、並べられた三首、四首を幾度も読み比べて背景に広がる世界を味わってみる。好忠の歌に、順や重之が反応し、和歌を共有して楽しみ、また挑戦するという文学的な営み、共鳴圏とも称すべき存在を表現レベルで剔抉してそれぞれの意義を明らかにした成果が、本書の大きな功績といえるであろう。

近年にいたって、和歌文学の研究は急速な発展と深まりをみせている。かつては八代集と主要な私家集が中心だったが、善本の発掘や電子情報レベルにいたる大量のテキストの提供があり、個々の詳細な注釈が次々となされ、広範

圍な語彙の検索が可能となるなど、以前には想像もできなかった資料の豊富な環境となった。それだけに、研究者にとってはかえって新しい成果の創出と開拓には厳しい状況にあるといえよう。その一つの切り口を提唱したのが N-stam による方法で、前著『古代後期和歌文学の研究』（二〇〇五年）で有効性を実践し、さらに今回は百首歌の分析によって詳細に意義を披歴する。

「返し」の歌といえ、時間を共有する返歌を前提にした贈答歌があるとはいえ、ここでは想定していなかった後の方が呼応して新しい歌を創作し、さらに別人もそれに倣うという連鎖が出現する。好忠は新奇なことをばを用い、偏狭で孤立した存在とのイメージが存するとはいえ、順や重之へ強い影響を与え、新しい文学を創造するという広がり

を見せるといふ発見は、顕著な成果といえよう。相模の『初度百首』と「返し」としての『権現返歌百首』の存在について、自作自演とか夫の公資などとされていたのを、表現の分析と関係の緊密さから定頼作との結論を導いてくる。思いがけないとはいえ、可能性を広げる提案として今後の有力な説となるであろう。

本書のもう一つのテーマは言語のジェンダー論で、具体的に『源氏物語』の使用例から貴重な問題点の指摘をする。たとえば、「飽く」「飽かず」「飽かぬ」といったことばなど、匂宮は女性に限られるのに対し、光源氏の対象は桐壺院や藤壺中宮の霊といった靈魂にも投げかけられるなど、そこから彼の常人とは異なる神性にまで論が及んでくる。これまでとは異なるアプローチによる源氏物語論になっており、性差とことばの問題は『万葉集』や『古今集』にも及ぶなど、刺激的な言及をしていく。言語分析と文学論とを結ぶ有効な架橋として、今後の大きな指針にもなっていることであろう。

(A5版、四二二ページ、二〇一五年四月刊、笠間書院)

(いい はるき・大阪大学名誉教授・阪急文化財団理事・館長)